

# 從生態女性主義視域閱讀亞歷塞維奇《車諾比的悲鳴》

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

## 摘要

關於女性勇於面對威脅人類生存一大危機論述上，生態女性主義研究立下了莫大的功績。鑒此本人立志從事女性與環繞女性之社會・環境關係上提出完整體系的研究成果。立足初啼之際，擬依據生態女性主義的理論，考察榮獲 2015 年諾貝爾文學獎桂冠亞歷塞維奇之《車諾比的悲鳴》。

考察結果顯示：《車諾比的悲鳴》主軸可整理成「車諾比人」用語之出現、比戰爭還悲慘的車諾比現況、抵制國家絕對權威三點。並從此結果浮現出，慘遭車諾比核能發電廠事故的受害者之苦難與俄國境內民族紛爭的複雜慘況。

再深入思考「再次質疑產生一切壓迫之權力支配關係」之際，順從國家政策之兵士、志願役、或是支撐權力結構一員的核心共產黨員之男性們，倍感來自於國家權威之壓迫，不選擇沉默地接受而提出質疑的態度。另一方面女性們對於絕對威嚴的國家政策感到極度不合理且毅然對抗爭取。透過生態女性主義理論解析之男性與女性在面對國家權大機器時展現的態度，正是證明生態女性主義理論之極高可行性。

關鍵字：生態女性主義、《車諾比的悲鳴》、亞歷塞維奇、支配關係

再次質疑

受理日期：2018.03.10

通過日期：2018.05.11

**A reading from the perspective of eco feminism**  
**Svetlana Alexandrovna Alexievich 's "Chernobyl prayer"**

Tseng, Chiu-Kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

**Abstract**

Regarding the relationship between the great catastrophe that threatened the survival of human beings and the female activity, the development of research by eco-feminism is remarkable. Therefore, as the first attempt to study the society and the environment surrounding women and women being in a literary system, this paper has studied Alexievich 's "Chernobyl prayer" award winning Nobel Prize for literature in 2015 based on eco feminism. As a result of this paper, the center of this work could be summarized into three points: the birth of the term "Chernobyl men", the disastrous reality of Chernobyl rather than war, and the resistance to the absolute authority of the state. The results suggest that the hardships of the people who encountered the accident at the Chernobyl nuclear power plant and the misery of ethnic conflict over Russia are emerging. Furthermore, considering the "reconsider control relations that produce all suppression", considering soldiers, volunteers who follow the national policy and Communist men who engaged in the support system felt the oppression from the state. They showed an attitude of skepticism without silence accepting. Women also felt unreasonable national policies absolutely, and fought strongly. These behavior of anonymous citizens in these work will prove the validity of eco feminism. Key words: eco-feminism, "Chernobyl prayer", Alexievich,

control relations, reconsider

# airiti

## エコフェミニズムの視点から読む アレクシエービッチの『チェルノブイリの祈り』

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

### 要旨

人間の生存に脅威を齎した一大惨事と女性の活躍との関連については、エコフェミニズム (eco-feminism) による研究の開拓が目覚しい。そこで、本論文では女性と女性を囲む社会・環境を文学的体系で研究する最初の試みとして、エコフェミニズムに拠って、考察対象を 2015 年にノーベル文学賞を受賞したアレクシエービッチの『チェルノブイリの祈り』にした。

考察の結果、内容の中心は、「チェルノブイリ人」用語の誕生、戦争よりも悲惨なチェルノブイリの現実、国家の絶対的権威への抵抗の 3 点に纏めることが出来た。その結果からは、チェルノブイリ原子力発電所事故に遭遇した人々の苦難とロシアをめぐる民族紛争の悲惨さが浮上していると言えよう。

さらに、「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」指針に係わって考えると、国家政策に従う兵士、志願兵、あるいは翼賛体制に携わった共産主義者の男性たちが国家からの抑圧を感じ、黙って受け入れることなく、懐疑を示す態度を示した。女性たちも絶対化された国家政策を理不尽に感じ、屹然と強く闘っていた。こうした作品中の無名の市民の行動こそがエコフェミニズムの有効性を立証してくれる証になろう。

キーワード: エコフェミニズム、『チェルノブイリの祈り』、  
アレクシエービッチ、支配関係、問い直す

airiti  
エコフェミニズムの視点から読む

アレクシエービッチの『チェルノブイリの祈り』

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

スベトラーナ・アレクシエービッチ(1948-)が2015年にノーベル文学賞を受賞したことは、記憶に新しい。東日本大震災(2011年3月11日、通称「311」)後の日本では、彼女の受賞を契機にチェルノブイリ原子力発電所事故に遭遇した人々の証言を取り上げた『チェルノブイリの祈り』が再び脚光を浴びるようになった。

社会・環境問題に直面した女性の活躍はアレクシエービッチだけではない。化学薬品や農薬による環境破壊の問題を摘発したレイチェル・カーソン(1907-1964)の『沈黙の春』(1962)の出版はアメリカ政府の環境政策を左右するほど大きく貢献した<sup>1</sup>。一方、日本では長年にわたり水俣病患者と一緒に戦い、書き続けた石牟礼道子(1927-2018)の『苦海浄土』が公害の告発文学<sup>2</sup>として位置づけられている。そして、「日本のレーチェル・カーソン」<sup>3</sup>とまで呼ばれた有吉佐和子(1931-1984)の『複合汚染』<sup>4</sup>は日本の公害防止政策のきっかけとして評価されている。また、『祭りの場』などの原爆文学創作に専念した林京子(1930-2017)、『献灯使』などの原発文学創作に力を注い

---

<sup>1</sup> 原強(2001)『「沈黙の春」の40年』かもがわ出版 P9では、「ケネディ大統領の命を受けて科学諮詢委員会が設置され、カーソンの主張を調査し、危険な農薬の使用禁止へと向かわせることになった」とある。

<sup>2</sup> 篠田知和基(1999)「環境文学から見たフランス文学」『名古屋大学文学部研究論集(文学)』45号名古屋大学文学部 P247では、石牟礼道子の『苦海浄土 わが水俣病』(1969)を公害告発と分類している。

<sup>3</sup> 星寛治(2004)「わが内なる有吉佐和子—複合汚染—から三〇年に想う—」『土と健康』32(7)有機農業研究会 P3。

<sup>4</sup> 奥野健男(1975)「解説」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社 P616では、「現代に生きる文学者の魂がほとぼしりあふれている純粋な文学作品」と評価されている。

だ多和田葉子<sup>5</sup>(1960-)もいる。このように、古今東西の例に鑑みると、ジャーナリスト、科学者、小説家と職種は違うにもかかわらず、生きた時代の人間の生存に甚大な脅威を齎した一大惨事に強く関心を示し、それに耐え抜いて告発する女性達の行動力、活躍には目を見張るものがある。しかも、こうした問題に臨む女性たち、例えば石牟礼道子と有吉佐和子は自分が女性であること<sup>6</sup>を常に意識して創作活動をしている。

人間の生存に脅威を齎した一大惨事と女性の活躍との関連については、エコフェミニズム(eco-feminism)による開拓が目覚ましい。311以降の原発文学研究を進めてきた論者はネイチャーライティング(nature writing)、エコクリティシズム(ecocriticism)、エコフェミニズムへと辿り着いた。そこで、女性と女性を囲む社会・環境を文学的体系に研究する最初の試みとしてエコフェミニズムに拠って、考察対象をアレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』にし、女性たちが社会に向けて活発に活動した様子を解明しようとする。手順としては、まず、エコフェミニズムの用語の由来、起因・誕生、分類、定義・変遷などを順に振り返り、整理する。そして、エコフェミニズムに基づいてアレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』の分析を行い、基本的に女性と女性を囲む社会・環境文学の研究体系作りを目指す。ちなみに、後述するが、本論文の次節でエコフェ

---

<sup>5</sup> 早川紀代・江刺昭子編(2016)『原爆と原発、その先—女性たちの非核の実践と思想』御茶の水書房 P39 では、「女性たちの反核の実践と思想を考える時、女性はいのちの連関に責任を持つ産む性ゆえ、将来の結婚や妊娠・出産時の核への不安や恐怖は男性より強いとされる」とある。

<sup>6</sup> 有吉佐和子・華山謙・星野芳郎「座談会「複合汚染に救いはあるか」(1975)『朝日ジャーナル』Vol. 17No. 36 朝日新聞社 P4 では、「やっぱり女性作家だからかな、食べ物から初めていくから、いいんですね」との星野芳郎の発言に対して、有吉佐和子が「子供に対する直接的な義務感のほうじゃないですか。男よりも女のほうが強いですからね、義務意識が」と子供に対する女性の持つ義務意識を強調している。一方、石牟礼道子(2004)「この世にあらざるように美しく」『石牟礼道子全集不知火第三巻』藤原書店 P501-502 では、「男の人は存在的に政治テーマを持たずにはいられないと感じるわけです。女は権力というのはあまり好きじゃないんですね。そこに、男と女の階級差みたいなものがあるわけですが、(中略)男は一口に言えば、権力によって生きるし、女たちは全然そういうものではない方向性しか、男と生きていけないわけですから」と述べて、女性より男性の方が持つ権力欲が強いと指摘している。

ミニズム (eco-feminism) に関する先行研究を探ってみた結果、生物的性別の女性だけではなく、エコフェミニズム的思考を擁護する男性をもエコフェミニズム運動に取り込む一員として認め、広汎な定義に立つ立場を取ることをここで断っておきたい。

## 2. エコフェミニズム (eco-feminism) 概念について

石弘之<sup>7</sup>によれば、環境問題の歴史は自然保護の時代 (19 世紀後半～1960 年代初期)、環境保護の時代 (1960 年代初期～1980 年代半ば)、エコロジーの時代 (1980 年代半ば以後) に分けられる。この歴史の中で出来たエコフェミニズム (eco-feminism) 概念を、用語の由来、起因・誕生、分類、定義、変遷といった順で見よう。

### 2.1 エコフェミニズム (eco-feminism) 用語の語源

エコフェミニズム (eco-feminism)<sup>8</sup> はエコロジカル (ecological) とフェミニズム (feminism) を組み合わせて出来た言葉で、1974 年に環境革新を先導する女性たちに呼びかけたフランスのフランソワーズ・ドゥボンヌによって命名された用語である。人間による自然の支配と男性による女性の支配には重要な関係があるという洞察から、新しい自然と人間の関係、女性と男性の関係を求める思想として、アメリカで一層発展したそうである<sup>9</sup>。

### 2.2 エコフェミニズム (eco-feminism) の起因・誕生

フランソワーズ・ドゥボンヌは、エコロジカル・フェミニズムの立場から「地球環境破壊は利潤目的という男性権力固有の物の見方

<sup>7</sup> 石弘之 (1996) 「地球環境問題の意識の変遷」『環境情報科学』25 巻 1 号環境情報科学センター P26。

<sup>8</sup> 山口裕司 (2003) 「エコフェミニズムの論点とその可能性—C・マーチャントを手がかりに—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 10 巻代 1 号宮崎公立大学人文学部 P310 では、「エコフェミニズムは第三のフェミニズムとして位置づけられるのかどうか一つの論点になるだろう」としている。また、森岡正博 (1995) 「エコロジーと女性—エコフェミニズム」小原秀雄監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会 P153 では、1892 年に「エコロジー」という学際的科学を提唱したエレン・スワーロと、1962 年に『沈黙の春』を出版したレイチェル・カーソンの 2 人の女性が初期のエコフェミニストであることに触れている。

<sup>9</sup> 井上輝子・上野千鶴子代表編 (2000) 『岩波女性学事典』岩波書店 P44。

に起因する」<sup>10</sup>と述べた。そして「公害・環境汚染の出現により、自然を支配するのではなく自然と共生するというエコロジーの考え方も出現し、フェミニズムと互いに影響を与え合って、エコロジカル・フェミニズムが誕生した」<sup>11</sup>という。また、横山道史は、エコフェミニズム(eco-feminism)を「男と女の関係の変革を含めた、従来の社会のあり方の問い直し、自然環境保護、反核、反原発という具体的目標を掲げて闘う実践思想」<sup>12</sup>としている。

### 2.3 エコフェミニズム(eco-feminism)の分類

エコフェミニズム(eco-feminism)をキャロリン・マーチャント(Carolyn Merchant)によって、「リベラル・エコフェミニズム」(liberal ecofeminism)、「カルチュラル・エコフェミニズム」(cultural ecofeminism)、「ソーシャル・エコフェミニズム」(social ecofeminism)、「ソーシャリスト・エコフェミニズム」(socialist ecofeminism)の4つに分類されている。各分類から浮かび上がった選択肢としては、男女の違いを踏まえつつ女性の特性を生かす道と男女の二元論を超越しつつ男女がともに解放される環境政治を標榜する道の2つの選択肢を山口裕司は指摘した上、前者を実施し、その成果を生かす形で後者を目指す段階論<sup>13</sup>を考えている。ちなみに、マーチャントの分類以外にも、ダブスンによる分類<sup>14</sup>もある。

### 2.4 エコフェミニズム(eco-feminism)の定義、変遷

フランソワーズ・ドゥボンヌは「惑星における人間の生存を賭け

<sup>10</sup> 進藤久美子・谷中寿子訳補訂(2003)『世界女性史年表』明石書店 P459。

<sup>11</sup> 山口裕司(2003)「エコフェミニズムの論点とその可能性—C・マーチャントを手がかりに—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第10巻1号宮崎公立大学人文学部 P304。

<sup>12</sup> 横山道史(2007)「日本におけるフェミニズムとエコロジーの不幸な遭遇と離別—フェミニズムとエコロジーの結節点に関する一考察」『技術マネジメント研究』横浜国立大学技術マネジメント研究学会 P21。

<sup>13</sup> 同注11、P303。

<sup>14</sup> 同注11、P314では、ダブスンによる2分類を「ディファレンス・エコフェミニズム」(difference ecofeminism)と「デイコンストラクティブ・エコフェミニズム」(deconstructive ecofeminism)と触れ、「記述のカルチュラル・フェミニズムが前者に近く、リベラル・フェミニズムが後者に近い」とある。

たエコロジー革命を起す女の可能性」<sup>15</sup>をエコフェミニズムと定義したそうである。その後、さまざまなディープエコロジー的な考え方があったが、根本的にはフェミニズムの視座が欠けている<sup>16</sup>という。

多岐に発展してきたエコフェミニズム(eco-feminism)について、渡久山清美・渡久山幸功が「男性による女性支配(女性への抑圧構造)と人間による自然支配(自然・生態系に対する抑圧構造)は、同一の社会システム、資本主義家父長制あるいは開発家父長制という男性権力構造に起因する」<sup>17</sup>ことに注目し、「男性社会が作り上げた、この支配の構造それ自体を解消しないかぎり、環境問題も、女性支配もなくなる」<sup>18</sup>とする森岡正博の政治思想概念<sup>19</sup>を提起し、より広い視野で、「真の意味での社会変革を実現するために必要とされるエコフェミニズムは、女性だけではなく男性にも開かれているという認識を持って、脱男制的な男性、つまり、ステレオタイプの男性像を追い求めることのない、エコフェミニズム的思考を擁する男性<sup>20</sup>をエコフェミニズム運動に取り込んだり、増やしていくような包括的な理論構築の実践である」<sup>21</sup>と提案した。さらに、「エコフェミニズムは、(自然と女性という)単立した問題についての運動に終始するのではなく、すべての被抑圧集団の解放をめざす思想に至る」と再定義した喜納育江の説<sup>22</sup>を取り入れ、渡久山清美・渡久山幸功は

<sup>15</sup> 山口裕司(2005)「環境問題をめぐる女性と政治—エコフェミニズムとの関連で—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第12巻1号宮崎公立大学人文学部 P308。

<sup>16</sup> 同注15、P308。

<sup>17</sup> 渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考—開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論として—」『人間学科』29号琉球大学法文学部人間科学科 P156。

<sup>18</sup> 森岡正博(1995)「エコロジーと女性—エコフェミニズム」小原秀雄監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会 P152。

<sup>19</sup> 渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考—開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論として—」『人間学科』29号琉球大学法文学部人間科学科 P156。

<sup>20</sup> 同注11、P315で触れた長年原子力問題と取り組んできた高木仁三郎がその好例である。

<sup>21</sup> 同注17、P176。

<sup>22</sup> 喜納育江(2011)『〈故郷〉のトポロジー場所と居場所の環境文学』水声社 P152。



「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直すのがエコフェミニズムの基本思考であり、特に、グローバル化が進む経済構造や生態系の環境問題の時代を迎えた 21 世紀の現在、このような認識を極めて有効な概念であろう」<sup>23</sup>と帰結した。

そこで、本論文では、渡久山清美・渡久山幸功が広汎に下した「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことをエコフェミニズムの定義・指針とするのである。以下、それに基づき、『チェルノブイリの祈り』を考察することにする。

### 3. 『チェルノブイリの祈り』を概観

『チェルノブイリの祈り』は、事故から 10 年を経た 1996 年 4 月 13 日に『イズベスチヤ』に一部分発表<sup>24</sup>、雑誌『諸民族の友好』(1997. 1)に全文発表された<sup>25</sup>ものであり、アレクシエービッチは、人間がまだだれも経験したことの無い未知の謎としてのチェルノブイリを全世界に向けて突きつけた<sup>26</sup>。取材した相手は子供から年寄りまで、職業もさまざま、300 人にのぼる<sup>27</sup>という。作者の創作動機及び創作態度、作品の構成を見てみよう。

#### 3.1 『チェルノブイリの祈り』の作者の創作動機及び創作態度

自分の暮らしを「事故の一部分」<sup>28</sup>だと受け止めた作者アレクシエービッチは、「関心をひいたのは事故そのものじゃありません。(中略)この未知なるもの、謎にふれた人々がどんな気持ちでいたか、なにを感じていたかということです。チェルノブイリは私たちが解き明かさねばならない謎です」<sup>29</sup>(下線部分論者、以下同様)とし、「未来のことを書き記している」<sup>30</sup>という自己認識に到達した。「三年間」

<sup>23</sup> 同注 17、P171。

<sup>24</sup> 松本妙子(1998)「訳者あとがき」スベトラーナ・アレクシエービッチ著・松本妙子訳(2016・初 2011)『未来の物語チェルノブイリの祈り』岩波書店 P295。

<sup>25</sup> 同注 24、P297。

<sup>26</sup> 同注 24、P301。

<sup>27</sup> 同注 24、P302。

<sup>28</sup> 同注 24、P30。

<sup>29</sup> 同注 24、P29。

<sup>30</sup> 同注 24、P33。

ainiti

<sup>31</sup>の歳月を掛け、「職業も運命も世代も気質もさまざま」<sup>32</sup>な人間に聞きまわり、「チェルノブイリは彼らの世界の重要なテーマです。内も外もチェルノブイリの悪影響を被っている」<sup>33</sup>ことを探り、「同じ告白がくりかえされますが、私は意識的にこれらを本から削除しませんでした。(中略)削除せずに残したのには、たんに信憑性を期すためだけでなく、〈手の加えられていない真実〉のほうが起こりつつあることの異常さをよく映しだすように思えたからです。(中略)声にだして語られたことです」<sup>34</sup>とアレクシエービッチは影響を忠実に伝えることを目指した。また「一人の人間によって語られるべきことはその人の運命ですが、大勢の人によって語られることはすでに歴史です。二つの真実——個人の真実と全体の真実を両立させるのはもっともむずかしいこと」<sup>35</sup>を前に、『チェルノブイリの祈り』の完成を目指したのである。

さらに、『チェルノブイリの祈り』の翻訳者の松本妙子の話では、アレクシエービッチは「チェルノブイリは第三次世界戦争なのです。(中略)国家が人間に対していかに恥知らずな振る舞いをするか、こんなことを知ったのはわたしたちが最初なのです。国家というものは自分の問題や政府を守ることだけに専念し、人間は歴史のなかに消えていくのです。(中略)個々の人間の記憶を残すことがたいせつなのです」<sup>36</sup>と主張したそうである。これにより、国家対国民という構図はアレクシエービッチの創作の信念を支えた大事な立脚点だと言え、ここから抑圧を生産する支配関係を問い直すことを基本思考としたエコフェミニズムによる『チェルノブイリの祈り』の分析の妥当性が説明されているのである。

---

<sup>31</sup> 同注 24、P32。

<sup>32</sup> 同注 24、P32。

<sup>33</sup> 同注 24、P32。

<sup>34</sup> 同注 24、P31。

<sup>35</sup> 同注 24、P32。

<sup>36</sup> 同注 24、P303。

### 3.2 『チェルノブイリの祈り』構成

女性が語った「孤独な人間の声」に始まり、同じく女性が語った「孤独な人間の声」で締めくくった『チェルノブイリの祈り』では、女性の視点が重視されている。これ以外、アレクシエービッチ自身が語った「見落とされた歴史について」のほか、「第一章死者たちの大地」、「第二章万物の霊長」、「第三章悲しみをのりこえて」の3章を設け、各章を「兵士たちの合唱」、「人々の合唱」、「子どもたちの合唱」といった題名で表記した。ちなみに、目次にない節としては、「第一章死者たちの大地」には8節、「第二章万物の霊長」には10節、「第三章悲しみをのりこえて」には16節、合わせて34の節がある。

その中で語る人物は違っても、『チェルノブイリの祈り』の目次の最初と最後を女性が語った「孤独な人間の声」で統一したことは注目に値する。そこからは、『チェルノブイリの祈り』が語られたことに手を加えない作者の創作態度による「声にだして語られたこと」の「声」が、修飾語の「孤独」に比喻されていると明確にされよう。また、その後続く「合唱」とは、「〈手の加えられていない真実〉のほうが起こりつつあることの異常さをよく映しだすよう」な孤独な「声」の集合体で、非常時を暗喩しているとも見受けられよう。

### 4. エコフェミニズムによる『チェルノブイリの祈り』の分析

3章34節によって構成されている『チェルノブイリの祈り』の内容を、抑圧を生産する支配関係を問い直すことを基本的思考としたエコフェミニズムの定義・指針から分析すると、『チェルノブイリの祈り』の内容の中心は、「チェルノブイリ人」用語の誕生、戦争よりも悲惨なチェルノブイリの現実、国家の絶対的権威に纏めることができた。以下、この三点を中心に提起されている証言について見ていきたい。

## 4.1 「チェルノブイリ人」用語の誕生—悲劇を背負う運命の境界線

チェルノブイリ事件が起きてから、「チェルノブイリはすでにシンボルであり、比喩で」(P256)、あるいは「暗喩」(P218)となった。そして、「チェルノブイリの実験室だといまわれている」(P30)ベラルーシは、ウクライナとの南部国境近くにあったチェルノブイリ原子力発電所事故によって、「ベラルーシ人はチェルノブイリ人になった」(P30)というほど差別を受けて、被害を蒙った結果、「チェルノブイリは、私たちがひとつの時代から別の時代へと移してしまっただのです」(P30)としている。事故のために、「チェルノブイリの人々」(P215)、「チェルノブイリの子どもたち」(P215)、「チェルノブイリの移住者」(P215)という用語が生み出された中、仕方なく「チェルノブイリ人」になったグループと、好んで「チェルノブイリ人」になったグループが見られる。

### 4.1.1 仕方なく「チェルノブイリ人」になったグループ

「突然チェルノブイリ人に変わ」(P46)ったベラルーシ人の男は他のロシア圏の人々から「ちがう目」(P46)で見られるようになった。「<チェルノブイリ人>ということばはそのものがいまでも音響信号のよう」(P46)に感じている彼は、「失ったのは町じゃない、全人生なんだということ」(P47)と感じ、「二〇〇〇年までにベラルーシ人は全滅してしまうだろう」(P48)という危機感を抱く彼は、娘の死亡は、「チェルノブイリが原因なんだ」(P49)と証言したかったが、「望まれているのは、このことを忘れることなん」(P49)だと国家の絶対的権力の理不尽を訴えている。また、事故で国土の放射性物質汚染がひどいベラルーシ人の中には、国の疎開命令に従わずに故郷を離れない人々もいれば、国の疎開命令に従い、故郷を離れた人々もいる。疎開した人々は、「わしらを恐れているんだよ。汚染されているっていわれているから」(P53)と差別されたり、「嫁がぞうきんを持って家じゅう私のあとをつけまわし、ドアのノブや椅子をふいていたよ」(P53)と敬遠されたりした。あるいは実の妹に、「母乳を飲ま

せている赤ちゃんがいるから」(P218)と言われて、門前払いされた。大人だけではなく、子供まで疎開先で「放射線をだしているから、となりにすわると死ぬとでもいわんばかりに、(中略)〈ほたる〉とあだ名をつけ」(P169)られたり、「チェルノブイリのハリネズミ、ホタル。あいつ暗闇で光るんだぜ」(P218)と、「夜、庭に呼びだされました」(P218)りして、チェルノブイリ原発事故以後、ベラルーシ人は悲惨な差別と苛めをロシア社会で受けるようになっていく。

このような悲惨な目に遭い、帰郷を決めた時、「毒があっても、放射能があっても、ここは私の故郷よ。私たちはよそじゃよけいもの」(P51)と感じ、故郷こそ「生活共同体」(P56)だと悟った。そして、国の命令に従い、疎開したが、差別されて故郷に帰った人々が、「国をあてにしちゃいません。なにもいらない。ただ、私たちを放っておいてください」(P54)と、国家の威光を仰ぐことを諦めることにした。国家だけではなく、訪ねてきた人々に対しても、「私はこの子らの不幸を売り物にはしたくない。(中略)放っておいてくださいよ、みなさん、私たちはここでくらさなくちゃなんのです」(P133)と、外界と遮断したい願いを外部に向けて発信したのである。

#### 4.1.2 好んで「チェルノブイリ人」になったグループ

国土を事故で汚染されたベラルーシ人の中で、積極的にベラルーシを住処に選ぶ人々もいる。「同じタジク人、同じコーラン、同じ宗教でありながら、パミールとクリャーブのタジク人同士で殺し合っているんです」(P68)と嘆き、「たった五分か一〇分この世に生をうけただけ」(P69)の新生児を投げ捨てた場面を直撃したタジク人夫婦は、「こわいのは人間です」(P69)と呟き、放射能に溢れているチェルノブイリの土地を住みかを選んだのである。また、「戦争から逃げてるようにしてきた」(P75)、母がウクライナ人、父がロシア人でタタール人と結婚した、キルギスで生まれた家族連れの男は、「チェルノブイリに住みます。いまではここが私たちの家です。チェルノブイリが私たちの家、故郷なんです」(P77)と決心した。放射線への恐怖より、「ここでいわれているような恐怖を私は知らないのです」

(P77)と記憶に鮮明な戦争だけを逃げたい姿勢を示した。とはいえ、イスラム教徒に対する弾圧が続くロシアをめぐる内戦からの逃亡を目的に、「チェルノブイリ人」になったイスラム教徒の人々にも、目に見えない放射線が人体に影響を与えることは確かである。いずれにせよ、「チェルノブイリ人」になったことにより、差別と被差別、悲劇を背負う運命の境界線が画かれたと言えよう。

#### 4.2 戦争よりも深刻なチェルノブイリの現実——アフガン戦争後の新しい戦争

ロシアでのイスラム教徒や少数民族への攻撃によりチェルノブイリに移住した人々以外にも、戦争を体験したチェルノブイリ住民にはロシア兵たちがいる。ロシア兵は「戦争だけはまっぴらごめんですよ。ほんとうに恐ろしいわ」(P52. 59)、「戦争だけはほんとに恐ろしい」(P60)と繰り返したが、「チェルノブイリは戦争に輪をかけた戦争です」(P56、60)と、チェルノブイリ事故を恐ろしい戦争よりもさらに恐ろしい存在だと比喻している。実際に「アフガン戦争から帰ったばかり」(P84)の兵士は「まもなく<短期特別召集>の出頭命令書」(P84)を受け、チェルノブイリ事故処理の任務に赴いた。その兵士が漏らした「アフガンから帰ってきたときには、これから生きるんだということがわかっていた。でも、チェルノブイリではなんにもかも反対、殺されるのは帰ってからなんです」(P85)という感想からは、放射線が人体に与えた大きな影響が思い知られよう。また、同じアフガン戦争経験者は「アフガンで戦死すればよかったよ。(中略)あそこじゃ、死はありふれたことで、理解できることでした」(P91)と、チェルノブイリで忍び寄る死の影の不可解さに苦しむ様子を伝えている。

#### 4.3 絶対的国家権威への抵抗——男性の疑問と女性の敢闘

疎開を命じられた一般住民が発した「国をあてにしちやいません」(P54)の声、そしてチェルノブイリの事故処理任務に派遣された兵士達が「国家の利益のために、見たことをいいふらすな」(P92)と警告されたことは、いずれも国家権威を絶対的に維持する必要から来た

ainiti  
国家の命令である。その命令に対して、「しかしぼくたち以外には、あそこでなにが起きたか、だれも知らないんです。ぼくたちは、ぜんぶを理解しているわけじゃないが、ぜんぶ見たんです」(P92)と関係者たちは疑問を呈せざるを得ない。

また、工場から直接召集された志願兵は「六ヶ月間」(P209)事故処理作業に当てられた。「志願兵諸君、前へ進め」(P209)と司令官の命令に従い、「除隊前に全員が原子炉の屋上に追いやられ」(P209)た。結局全員が原子炉の放射線で「二級身体障害者」(P208)となり、原子炉の屋上で穴を開けた人だけは「一級身体障害者」(P211)となった。志願兵は、こんな悲惨な結果になったことを「運命論者なんです。合理主義のものじゃない。スラブ的な思考法」(P208)に帰着させた。これは、震災地を廻ったカメラマンが言った「わが国の政治家は命の価値を考える頭がないが、国民もそうなんです」(P214)と相通じている。現場で体験した多くの不条理から、国家の命令を絶対視する兵士でさえ、権威を維持するためだけに不条理を強いる国家を信用しなくなり、国家政策に不審を持ち、深い懐疑を持っていることが分かった。

一方、国家権威の中核的な支配階級は、事件当時、党地区委員会第一書記が、「共産主義者は全員犯罪者。(中略)あらゆることに対して責任を負わされている」(P223)ことや「共産主義者が国民をだまし、真実をかくしたのだ」(P224)との非難に対して、中央委員会や党の州委員会から与えられた「パニックを許すな」(P224)という課題に忠実に守り貫いた「義務」(P224)のゆえ、「犯罪者ではない」(P229)と弁解した。犯罪者ではないにせよ、「政治的利益が最優先されました」(P224)と本人が認めた以上、国家政策に疑問を感じながらも、国家権威を維持する共犯を選んだという謗りは免れない。支配階級に当たる人物たちも、この事故の悲惨さについて国家権威の絶対性を疑う疑問を呈せざるをえなかった。それほど事故が深刻であったことが、ここで提示されている。

一方、女性の敢闘であるが、広河隆一は、目次の最初に出た「孤

独な人間の声」に出た事故処理に動員された消防夫の妻リュドミーラは「夫の体がぼろぼろに剥離していくさなかでも、尊厳ある人間の姿を伝えている」<sup>37</sup>とし、それこそが彼女の夫への「愛のありかた」<sup>38</sup>だと主張している。彼女は回りから「忘れないでください。あなたの前にいるのは、主人でも愛する人でもありません。高濃度に汚染された放射性物体なんですよ」(P16)、「ご主人は人間じゃないの、原子炉なのよ」(P18)と言われた忠告に耳を傾けず、ひたすら夫を看病したが、「科学のために」(P19)、「遺体は放射能が強い」(P21)ゆえ、「あなたのご主人は英雄であり、もう家族のものではない。国家的な人物で国家のものなんです」(P21-22)と、夫の遺体を引き渡されなかつたりした。また、生後まもなく死亡した娘の遺体も渡してもらえなかった。「あんたたちの科学なんて大きらい。憎んでいるわ！科学は最初に夫をうばい、今度は娘まで」(P24)と憤るリュドミーラの憤慨から、国家が人間を原子力研究のために抑圧していることが明らかに分かる。また、もう1人の母親が産んだ娘は、「生きている袋」(P93)で、「からだの穴という穴がふさがり、開いていたのはわずかに両目だけでした」(P93)。その母親が、「チェルノブイリの身体障害者」(P96)になったのは、「私たち夫婦のせいじゃない、私たちが愛し合ったことが悪いんじゃない」(P96)と娘に分かってもらうため、国家・政府に証明を発行してもらった。しかし、医者には「われわれには通達があるのです。娘さんのケースは、いまのところ一般疾患として診断せざるをえません。二、三〇年後にチェルノブイリのデータバンクがそろえば、病気と放射線に関連づけることができるでしょう」(P96)と言われ、また役人にも「チェルノブイリの特典めあてだ！チェルノブイリ補償金めあてだ！」と怒鳴られた。しかし、彼女は屈することなく、一母親として国家と4年間闘争を続けた結果、「恐ろしい異常とレベルの放射線の関係を裏付ける診断書」

<sup>37</sup> 広河隆一(2011)「解説」スベトラーナ・アレクシエービッチ著・松本妙子訳(2016・初2011)『未来の物語チェルノブイリの祈り』岩波書店 P308。

<sup>38</sup> 同注 37、P308。



(P96)をようやく手に入れたのである。

このように、国家の絶対的権威を前に、命の価値を認められない事故現場を体験した兵士や中核的支配者の男性たちですら国家政策に対する疑いは、隠しきれなかった。それに対して、人と愛し合うこと、愛し合う人と子供を作ることは、女性にとって当たり前のことだが、国家の絶対的権威を前に、人間として当たり前のことが当たり前のことでなくなることに立ち向かう上述の2人の女性の敢闘振りは、世間の圧力に負けず、公害を摘発してきた子環境保護文学やジャーナリズムの先駆者とともに世に賞賛されるべき存在と言えよう。男性たちが懐疑で止まっているのに対して、女性達はそれを様々な抗議の形で社会に発して、闘争を続けており、環境問題などの深刻な生活の危機は女性達でなければ対応できない課題提起であることを示している。エコフェミニズムという形で、女性に注目している視点の有効性は、『未来の物語チェルノブイリの祈り』からも明確に浮かびあがってくる。

## 5. おわりに

渡久山清美・渡久山幸功がエコフェミニズムについて下した広汎な定義を参考に、「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことをエコフェミニズム(eco-feminism)の指針により、『チェルノブイリの祈り』を考察、解析した。そこで、「チェルノブイリ人」用語の誕生、戦争よりも悲惨なチェルノブイリの現実、国家の絶対的権威への抵抗の3点に纏められた結果からは、チェルノブイリ原子力発電所事故に遭遇した人々の苦難とロシアをめぐる民族紛争の悲惨さがそれぞれの証言から浮上していると言えよう。

さらに、「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことを考えると、国家政策に従う兵士、志願兵、あるいは翼賛体制に携わった共産主義者の男性たちが国家からの抑圧を感じ、黙って受け入れることなく、不審な態度を示した。と同時に、絶対化された国家政策を理不尽に感じ、闘った女性たちの姿がエコフェミニズムの有効

性が立証してくれる証になろう。

(注)

本論文は、106年度台湾科技部研究計画案(MOS106-2410-H-032-017)による研究成果の一部である。

テキスト

スベトラーナ・アレクシエービッチ著・松本妙子訳(2016・初 2011)  
『未来の物語チェルノブイリの祈り』岩波書店

参考文献

- 奥野健男(1975)「解説」有吉佐和子(2014・初 1979)『複合汚染』新潮社
- 有吉佐和子・華山謙・星野芳郎「座談会「複合汚染に救いはあるか」(1975)『朝日ジャーナル』Vo1.17No.36 朝日新聞社
- 森岡正博(1995)「エコロジーと女性—エコフェミニズム」小原秀雄監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会
- 石弘之(1996)「地球環境問題の意識の変遷」『環境情報科学』25 巻 1号環境情報科学センター
- 松本妙子(1998)「訳者あとがき」スベトラーナ・アレクシエービッチ著・松本妙子訳(2016・初 2011)『未来の物語チェルノブイリの祈り』岩波書店
- 篠田知和基(1999)「環境文学から見たフランス文学」『古屋大学文学部研究論集(文学)』45号名古屋大学文学部
- 井上輝子・上野千鶴子代表編(2000)『岩波女性学事典』岩波書店
- 原強(2001)『「沈黙の春」の40年』かもがわ出版
- 進藤久美子・谷中寿子訳補訂(2003)『世界女性史年表』明石書店
- 山口裕司(2003)「エコフェミニズムの論点とその可能性—C・マーチャントを手がかりに」『宮崎公立大学人文学部紀要』第10巻代1号宮崎公立大学人文学部

石牟礼道子(2004)「この世にあらざるように美しく」『石牟礼道子全集不知火第三卷』藤原書店

星寛治(2004)「わが内なる有吉佐和子—”複合汚染”から三〇年に想う」『土と健康』32(7)有機農業研究会

山口裕司(2005)「環境問題をめぐる女性と政治—エコフェミニズムとの関連で」『宮崎公立大学人文学部紀要』第12巻1号宮崎公立大学人文学部

横山道史(2007)「日本におけるフェミニズムとエコロジーの不幸な遭遇と離別—フェミニズムとエコロジーの結節点に関する一考察」『技術マネジメント研究』横浜国立大学技術マネジメント研究学会

喜納育江(2011)『<故郷>のトポロジー場所と居場所の環境文学』水声社

松本妙子(2011)「岩波書店現代文庫版訳者あとがき」スベトラーナ・アレクシエービッチ著・松本妙子訳(2016・初2011)『未来の物語チェルノブイリの祈り』岩波書店

広河隆一(2011)「解説」スベトラーナ・アレクシエービッチ著・松本妙子訳(2016・初2011)『未来の物語チェルノブイリの祈り』岩波書店

渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考—開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論として」『人間学科』29号琉球大学法文学部人間科学科

早川紀代・江刺昭子編(2016)『原爆と原発、その先—女性たちの非核の実践と思想』御茶の水書房